

ちつきょう 竹喬さんの記念館

かさおかしりつちつきょうびじゅつかん 『笠岡市立竹喬美術館』

笠岡地区まちづくり協議会 文化部会・子ども新聞部

(その3)



笠岡市立竹喬美術館遠景

日本の美しさを描いて

八月二十二日、私たち竹喬班は、笠岡市民の熱い願いで開館した笠岡市立竹喬美術館に行つた。そして、上藪館長さんに小野竹喬画伯について話をうかがつた。竹喬画伯は、笠岡市出身の画家だ。十五才の時に日本画の竹内栖鳳塾に入門し、昭和五十四年に八十九歳でなくなるまで日本の美しさを描き続けた。代表作に「奥の細道句抄絵」、「樹間の茜」、笠岡を描いた「島一作」、「冬日帖」など

がある。竹喬画伯は、「虚心になると自然は近づいてくる」という言葉を残している。自然をありのままに素直に見る目と、自分の心の目の二つを使って日本画界に新たな風を巻き起こした。そして、昭和五十二年『笠岡市立竹喬美術館』が開館。今は、寄付などで年々作品は増えている。「保管場所がせまくなつ



上藪館長さんにインタビュー

て困っています。うれしい悩みですけれどね。」と上藪館長さんは打ち明けてくれた。今でも、「竹喬さん」と親しみを込めて呼ばれる竹喬画伯の魅力をこの新聞で伝えたい。(六年 田中茉莉子)

shizen no shizen 自然を

竹喬さんは、春夏秋冬の自然の風景が得意だったそうだ。大正時代には、一日の朝から夕方にかけての空の表情の変化や古城山から見える笠岡の海を好んで描いた。特に、神島と片島の風景をたくさん描いている。それらは、京都の画家たちに評判となり、神島の名前が全国に知れ渡つた。「ふるさとを愛し、こんなにたくさんさんの絵を描き残した画家はめずらしい。」と館長さんは語ってくれた。すごい人が笠岡にいたことにあらためて感動した。(五年 佐藤美織)



冬日帖(笠岡商業高校の裏山)

かきかえのノート

竹喬さんは、四十代の頃から古い作品を引き取り、描きかえて渡すということに四十年間も続けた。「描きかえのノート」には、引き取って処分した作品と新しく描いた作品をスケッチし、いつ誰に渡したか、そのいきさつなどが記録してある。年を取るにつれて、ますます厳しくなつた。やはり誠実で優しい、自分に忠実な竹喬さんの人柄がよく分かつた。(五年 馬越袖未)

笠岡の風景

竹喬さんは、笠岡をたくさん描いている。特に、北八幡神社から金浦へぬける「木之目越え」の景色や住吉港の沖をいく船を描いた。上の作品は商業高校の後ろの段々畑を描いている時に、お弁当を届けに来てくれたお手伝いさんを描いたそうだ。どこに居るのでしょうか?(六年 後藤藍里)

十八点から

初めは、わずか一八点しかなかった作品が、今では一〇〇〇点をこえている。「百倍以上になつた。」と館長さんがうれしそうに話してくれた。日本画は、日光が当たると色が変わつて修理できなくなるので照明や温度、湿度などに特に気を配っている。昨年が開館三十周年だった。(四年 金山 愛)

記念品売り場

一階では絵はがきや小物入れ、ハンカチ、絵の入ったメモ帳などを売っている。ぜひ一度、行つてみてください。(四年 藤本春花)



記念品売り場